
三宅香帆『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』集英社新書 2024 年

◎修養と教養

修養…立身出世のため、社会不安のなかで自分を律し、個人として国家や社会を支えられるようになること ノン・エリートの実践

教養…大正時代、労働者と区別しようとする「読者階級」ことエリート中間層

p.160 読書は常に、階級の差異を確認し、そして優越を示すための道具になりやすい。

◎現在、ノイズとしての読書

➡本書は明治以降のそれぞれの時代に、読書が担った「意味」を辿り、俯瞰したうえで、p.176から「読書とはノイズ」であるとして、読書の本来的な「意味」を再考していく。

p.176 読書とはノイズである / p.203 過去はノイズである / p.206 掲出図

知識と情報の差異

情報 = 知りたいこと

知識 = ノイズ + 知りたいこと

※ノイズ 他者や歴史や社会の文脈

➡すこし前なら、「読書がもたらす豊かさ」と言えたはずだ。

しかし現在では、「情報」の側に軸足が置かれていることへの卑下もあってか、「ノイズ」という言葉があてられている。本書が企図するところも、まさにこの点にあると感じた。

直訳すれば“ノイズ”は「雑音」という意味になる。(すると、さながら読書会は「雑音会」ということになるだろうか！)

本書は、2024年の年間ベストセラー第1位(新書)だという。この大ヒットは、現在の「情報化社会」において、読書を「ノイズ」とする分析の正しさを証し立てているのだろうか。

◎明治以降の近代化の成れの果て

新自由主義の現在

p.212 新自由主義

個人の誰もが市場で競争する選手だとみなされるような状態であるため、自己決定・自己責任が重視される。たとえば近所だから助け合う、同じ会社だから連帯して組合をつくるなどの共同体論理よりも、現代では組織や地域に縛られず自分のやりたいようにやること、自分の責任で自分の行動を決めることなどの個人主義が重視されている。これも新自由主義的思想だと言えるだろう。

➡逆説的だけれども、これは一見すると「個人主義」とされるので、「個人」の自由を重んじている

ように見えるけれども、しかし、実際には後段にあるように「市場の波にさらされている」ため、自由なわけではない。「新自由主義的発想を内面化している」(p.214)
むしろ、〈個〉はないがしろにされている。つまり、新自由主義からおける自由は与えられていない。

文明はあらゆる限りの手段をつくして、個性を発達せしめたる後、あらゆる限りの方法によってこの個性を踏み付けようとする。一人前(ひとりまえ)何坪何合かの地面を与えて、この地面のうちでは寝るとも起きるとも勝手にせよと云うのが現今の文明である。同時にこの何坪何合の周囲に鉄柵を設けて、これよりさきへは一步も出てはならぬぞと威嚇(おど)かすのが現今の文明である。何坪何合のうちで自由を擅(ほしいまま)にしたものが、この鉄柵外にも自由を擅にしたくなるのは自然の勢(いきおい)である。憐れむべき文明の国民は日夜にこの鉄柵に噛みついて咆哮(ほうこう)している。文明は個人に自由を与えて虎のごとく猛(たけ)からしめたる後、これを檻(かんせい)の内に投げ込んで、天下の平和を維持しつつある。この平和は真の平和ではない。動物園の虎が見物人を睨(にら)めて、寝転んでいると同様な平和である。檻の鉄棒が一本でも抜けたら-世はめっちゃめっちゃになる。(夏目漱石『草枕』青空文庫)

◎読書がもたらす豊かさ

著者が「ノイズ」という言葉を使うのは「危機意識」の表れだともいえる。
この危機意識のなかで、著者は次のように本を読むことの「意味」を述べる。

p.227 他者の文脈を知る

大切なのは、他者の文脈をシャットアウトしないことだ。
仕事のノイズになるような知識を、あえて受け入れる。
仕事以外の文脈を思い出すこと。そのノイズを、受け入れること。
それこそが、私たちが働きながら本を読む一歩なのではないだろうか。

p.236

本を読むことは、自分から遠く離れた他者の文脈を知ることである。しかしそれは遠く離れているとはいえ、自分と完全に切り離されているわけではない。いつか自分につながる文脈なのかもしれない。

➡読書会でいろいろな課題図書が選書されるなかで、はからずも、書かれた時代や場所を超えて、さまざまな文脈でつながっていくことを目の当たりにしてきた実感があるが、まさにこのことを言い得ていると感じた！

◎近代の成れの果て、新自由主義の個人主義を超えて

P.259 にわか「半身社会」

この考え方には、平野啓一郎の「分人」という考え方と響き合うものが感じられる。

〈時間があれば、私のノイズ！〉

◎戦後八〇年について

前回、船越さんから「戦後八〇年とは特別な時代だったのではないか」という指摘があった。加藤典洋(1948～2019)『敗者の想像力』(集英社新書、2017年)では次のように書かれている。

戦後が七〇年目を超えてしまったが、誰もが考えることは、なぜここまで戦後は終わらないのか、ということだろう。この問いは当然、ではどうすることが戦後を終わらせることなのか、という問いを含んでいるのだが。

加藤は「占領」が未だ続いていることを指摘する。つまり戦争は終わっていない。特別な時代とは、戦争が終わっていないことを「やり過ごせた」時代なのではないか、と考えることができる。

ハン・ガン(1970～)の『少年が来る』を課題図書とした回では、朴正熙(1917～1979)に日本帝国陸軍の軍事文化と行動様式の影響があることを確認した。光州事件(1980)は、日本の戦争が海を隔てた隣国で継続していたという想像を与える。つまり、朝鮮半島における戦争の継続は「戦争のアウトソーシング」とも捉えられる。日本の戦後復興から高度経済成長にかけては、ふたつの特需——朝鮮特需(1950年～)、ベトナム特需(1960年代半ば～1970年代初頭)——によって下支えされていたともいえる。(1950年10月には、A級戦犯とされていた岸信介の公職追放が解除されている。)

国内では、昭和34年に交通事故による年間死亡者が1万人を超え、死者数が日清戦争に迫ったことから「交通戦争」と呼ばれた。また教育の現場では学歴偏重のもと、「受験戦争」が社会問題となった(NHK『シリーズ昭和百年(3)高度成長 やがて悲しき奇跡かな』)。

戦争の“力”は雲散霧消したのではなく、形を変えて瀰漫していたのである。

番組では歴史家・色川大吉(1925～2021)の言葉が紹介されていた。「水俣病は、日本が高度経済成長を成し遂げ、国民が豊かになった代償として起こったものではない。順序は逆である。このような惨たんたる犠牲を平然と見過ごし、利益追求を優先させた社会の体質があったからこそ、高度成長が可能だったのである。」

◎述語的論理

前回のバルガス＝リョサ(1936～2025)『緑の家』では、エピローグでラリータが話しかけていた人夫はフシーアだったのではないか、という読みを平野さんが提示された。

p.397

ラリータの方に目をやると、彼女は人夫の肩に手を置いて、熱心に話しかけている。体を小さくしてじっとその言葉に耳を傾けていた人夫は、首を横に振るとじりじり後ずさりしてほかの人夫たちの中にまぎれ込む。その人夫はすぐにぴょんぴょん飛び跳ねたり、金切り声をあげたり乗客のあとを追い回しはじめる。

フシーアのエピソードをふりかえると――

p.240 金切り声

p.279 「遠くから、いや灯だけでもいいからイキースの町を見たかったのに、
どうして見せてくれなかったんだ」

p.373 「フシーアはぴょんぴょん飛び跳ねながら尋ねるが」／
「フシーアはかがみ込んだアキリーノのまわりをぴょんぴょん飛び跳ねながら」

とあり、エピローグの人夫はフシーアと同じ動作をしている。

改めて指摘を受けると、この人夫にフシーアを読み込むこと(＝フシーアを想起すること)は自然に思えてくる。

ゆえに問いは反転する。むしろ、この自然な理解を阻んでいたのは何か。なぜこの人夫にフシーアを認めなかったのか。

それは、主語に注目して人物を見分けていたために、動作の同一性に思い至らなかったからではないか。そもそも『緑の家』を読みづらく感じさせていたのは、「誰が誰かわからない」という難しさであり、登場人物を主語に頼って判別しようとする読者の側に問題があったのではないか。

少なくとも、この人夫がフシーアでなかったとしても、この場面はラリータがかつてのフシーアを想起した場面として読むことができる。その動作に、ラリータはフシーアを見たのだ。

近代は「見かけの主語」から、それが何かを同定してきた。

哲学者の中村雄二郎(1925～2017)が、西田幾多郎(1870～1945)の「述語論理」という議論をとりあげていた。以前はその意図を理解できなかった。今回、動作＝そこに働いている力の同一性に着目することで、はじめて腑に落ちた。

これは資本主義のしくみにも通じている。商品は同じ商品名がついていれば同じと見なされ、同じ価格なら同じ価値とされる。しかし実際には、100円の鉛筆ひとつとっても、産地の木材や素材、製造の経緯は異なり、全く別の働きの結果として商品棚に並んでいるはずだ。それが同じパッケージに包まれることで、同一のものと扱われてしまう。

平野啓一郎(1975～)『本心』では、外見がそっくりの母親を再現するが、それは精巧に似せてつくられたにすぎなかった。母親の「母親らしさ」は、見かけの向こう側にあったのだ。

